

書き直された啄木日記について

小林 芳 弘

はじめに

明治41年1月初めの啄木日記が二つあることは、すでに知られている。1月1日に始まり、1月12日に終る「明治四十一年戊申日誌」と、その後改めて書き直された「明治四十一年日誌」とである。

これまで発表されたいくつかの研究論文によれば、日記が書き直された理由は、啄木の社会主義思想の芽ばえに関係するという説と、それとは関係がないとする説とに大別される。前者は、石井勉次郎¹⁾、加藤悌三²⁾、目良卓³⁾らによって、また後者は、今井泰子⁴⁾、塩浦彰⁵⁾らによってそれぞれ論述されている。同一人物の手による日記が二つ存在するなどということは、極めて稀なことである。尋常なこととは考えられない。その背景にはどんな謎がかくされているのか。

日記が書き直された理由を究明することには、二つの大きな意味があろう。第一は、啄木がどのような観点で日記を書き、日記をどのように位置づけていたかを知る格好の材料となり得るということである。また、明治40年末から翌年にかけて啄木一家の生活は、困窮を極めていた。凍付くような小樽の街で職を失い、借金取りに持たせてやる金にさえ事欠く大晦日を越

した。二つの日記に秘められた謎に迫ることは、小樽の窮乏生活の中で啄木は何を考え、何を求めていたのかを知るための手がかりになるのではないか。これが第二の意味である。

これらの二つの意味を追求するための最初の段階として、すでに提出されている、啄木日記書き直しの理由に関する諸説を改めて検証した。その結果、いくつかの知見が得られたので、ここに報告する。

1. 社会主義思想芽ばえ説

最初に、社会主義思想芽ばえ説の妥当性について検討する。ここでは、これらの説の代表的な目良卓の論文を中心に見ていきたい。

検討に入る前に、二つある日記の名称について、塩浦彰は、先に記された「明治四十一年戊申日誌」を一次日記、あとで書き直された「明治四十一年日誌」を二次日記と呼んでおり⁶⁾、本論文でもこれをそのまま使用させていただくことを、お断りしておく。

今回の啄木日記の問題にかかわることがらを図1に模式的に示した。一次日記は1月8日まで従来のものと差が認められない(図1.A)。しかし、1月9日に様相が一変する。

「午後沢田へ小国君と共に、留守、夜再び、

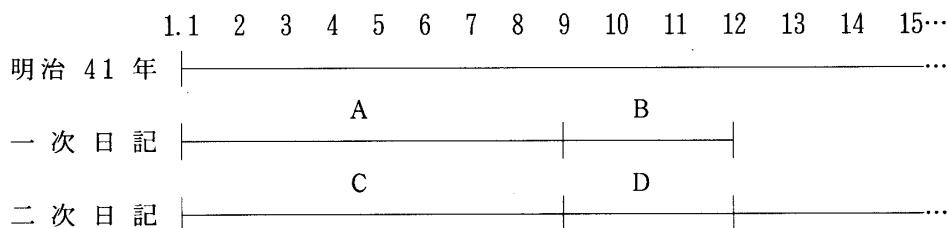


図1 一次日記と二次日記の比較 A: 通常の日記 B: メモ風の日記
C: Aをもとに書き直された日記 D: Bをもとに書かれた日記

奥村、谷と鯉江、婦人の話、ゴルキイ、函館の女、社会主義、個人解放運動、」となり、以下1月12日まで似たようなパターンが繰返され、そこで一次日記は終る(図1, B)。1月9日一次日記の最後にある、「社会主義、個人解放運動」という二つの単語が、二次日記で次のように書き直された。

「何日しか問題は社会主義に移り、革命を談じ、個人の解放を論じ、露堂君と予は就中壮快な舌戦を試みた。」

目良論文では、1月9日の一次日記がメモになっているので、この日の段階で啄木は日記を書き直そうと考えたと断定する。そしてこの日の小国との話の内容は、4日の社会主義講演会をふまえ、「今は社会主義を研究すべき時代は既に過ぎて、其を実現すべき時代になって居る。」ということを強調したのだらうと推論する。そこから目良は、1月4日の社会主義講演会から受けた感銘が1月9日の小国露堂との議論によって深められ、その思想についての自分の考えをまとめるために、さかのぼって日記を書き直す決心をしたのだという結論に達した³⁾。

目良は、1月9日一次日記をメモだとして、それは図1のAをCに書き直すためのものであると考えているが、果して本当にそうなのか。そして、その後の目良の論理の展開のしかたには、明らかに無理がある。1月4日の演説会に受けた感銘が、5日後の小国との議論によって深められたと考えるのはいいとしても、どうして日記を4日までさかのぼって書き直さなければならないのか。小国との舌戦によって深められた思想であれば、そのまま1月9日の日記に書けば良いのではないか。目良の考えでは、そのまま書き続けられれば良いことを、わざわざメモにしたことの意味が説明し難い。図1のAのあとにDが続くのが自然で、果してCが必要だったのかという疑問がわく。

さらに目良は、明治41年1月の時点で啄木がそれ程社会主義に関心を示していないとする国崎望久郎の見解に対して、そのような考えでは一次と二次の二種類の日記の存在について説明できないのではないかと批判している。しか

し、これにしても、どちらか一方のみが正しいと仮定するともう一方が誤っていることになり、むしろ、目良に分が悪いのではないかと思われる。

塩浦彰は、日記書き直しの理由を、啄木の社会主義への関心の高まりに求めるのは疑義があるとして、沢田信太郎日記と高田紅果の「在りし日の啄木」を引用して反論している⁵⁾。つまり、「この時点での啄木の社会主義理解は、関心の高まりこそあれ、年末に比して日記の書き換えを促すほどの進展を見せておらず、」もし、「日記の書き換えが、社会主義思想の目覚めとその確認を目指すものならば、元日の書き換えはもっと啄木らしい論理の展開がなければならない。」としている。この批判には説得力があり納得できる。

2. 沢田・桜庭ラブロマンス説

塩浦彰は、「啄木浪漫・節子との半生」の中で、日記書き直しの理由を、沢田信太郎と桜庭ちか子との結婚話の進展ぶりに、啄木がストーリーテラーとしての意欲をかきたてられたことによるとしている。1月9日に二人のラブロマンスの進展を初めて知って、無為に日を過す浪人啄木の創作的興味が起こり書き直しを決めた。そして、それはまた、生活苦からくる苛立ちから啄木自らを解放する手段でもあったと論じている。

塩浦は、「一次日記は、1月9日以降メモ風に変っているので、理由はまずこの日に求められるべきであろう。」というところから出発して、沢田と桜庭に到達する。塩浦の考えを図1で説明するとすれば、Dを書くためにBをメモにしたと言うことができよう。しかし、それにしても、啄木はなぜラブロマンスをそのまま1月9日一次日記に書かずに、メモにしたのかという疑問は残る。二次日記を見ながら啄木の行動を考えると、職がなかった割には多忙で、かなり頻繁に出歩いていたことがうかがえる。しかし、忙しかったため一次日記をメモにしたと考えると、1月9日以前にまでさかのぼって、すなわち図1のAをCに書き直すことの意味が説

明し難い。さらに、塩浦によるラブロマンス説で気になることは、二人の結婚話を知って一次日記をメモに換えた1月9日の一次日記の内容は、さほどとり立てて問題にすることが含まれていないように思えることである。小説を長々と書くような内容になるのは1月10日の二次日記からである。ただし、ここでは実際に1月9日の一次日記を書いた日時がいつなのかという問題が未解決なので、単純に結論を出す訳に行かない。二つの日記にかくされた謎を解くうえで、1月9日の一次日記は極めて重要だと思われる。そこには、日記書き直しを決定した時期や動機を考えるためのヒントが隠されていると予想されるからだ。もっと詳細に1月9日の部分を検討する必要があると思われる。

塩浦による社会主義思想芽ばえ説に対する反証は、十分に説得力がある。しかし、今井泰子の沢田信太郎説に対しては極く簡単にしか触れておらず、なぜ今井の説がいけないかという論証はなされていない。わずか一行で、「今井泰子の論ずる沢田再評価はさらに付随的に意識されたものであろう。」としている。塩浦の考えを図1をもとに整理すると、Dを書くためにBをメモにした。AをCに直したのは付随的なことであるということになる。

3. 沢田信太郎説

日記書き直しの理由は、沢田信太郎の評価を変えることにあったとする今井泰子の考えを支持する論文は現在のところない。目良は、「今井の説は説得力に欠ける。」として簡単にしりぞけている。

「石川啄木論」の中で今井は、「二つの日記において沢田の評価が大きく変化しているので、日記書きかえの理由もそこにある。」と述べている。しかしながら、その部分はわずか1ページ半しかなく、しかも、なぜそのような結論にいたったかという論証が、ほとんどなされていない。目良による説得力がないという批判もそのあたりを指しているかもしれない。今井には、日記書き直しの真相に迫ることが、啄木研究のうえで重要な意味のあることだという認識

は稀薄だったのではないだろうか。そのため、十分論証を行わずに結論だけを下したので、多くの研究者の支持を得られずに現在に至ったのであろう。

本論に入る前に一つだけ確認しておきたいことがある。これまで、ほとんどの研究者が、一次日記1月9日以降はメモであるとしてきた。しかし、それが本当にメモなのかという詳細な検討はなされて来なかった。ここは非常に重要な部分なので念入りに検討する必要がある。メモかどうか、本当にメモならばどの部分を書き直すためのメモなのか、メモの意味を熟考することが、日記書き直しの動機や理由を探るうえで不可欠であろうと思われる。

1月9日一次日記

「午前沢田へ小国君と共に、留守、夜再び、奥村、谷と鯉江、婦人の話、ゴルキイ、函館の女、社会主義、個人解放運動、」が、二次日記で

「午前露堂君と共に沢田君を訪ふたが留守。夜再び訪ふと、奥村寒雨君が行って居て、二人で僕の所へ来ようと云ふ話の最中であつた。四人火鉢を囲んで煙草の煙と共に気焔を吐く。

日報社へ今度来て理事になった華族の妾腹の子で法学士だといふ谷寿衡が蕩児鯉江の先棒で今夜桜庭女子を訪問した、といふ話は、大に予を激昂せしめた。沢田君は大いにハシャギ出して、東京で同じ下宿で出くはした、吟声の巧みな女の話などをする。自分も大に火鉢の縁を叩いて弁じた。何日しか問題は社会主義に移り、革命を談じ、個人の解放を論じ、露堂君と予とは就中壮快な舌戦を試みた。家に帰ったのは正に午前一時二十分。」となっている。両者を比較すると、一次日記の時刻・人名・事がらが、二次日記では、ほぼその順序通り文章化されていることがわかる。特に、一次日記二行目の「夜再び」以下は、これだけではその人物や事がらが、どうだったのかという判断はできず、意味不明である。1月9日以降の一次日記と対照的なのが、「十二月…小樽…」と題した部分である。

「十一日札幌に行き、小国君の宿にとまる。翌日山崎周信君と初めて会見す。中西代議士の起さむとする新聞に就て熟議したり。」
これと似た部分が、明治41年4月にもある。小樽の六日間、最後の函館と題したところである。そこからもう一ヶ所引用する。

「二十一日。風烈しく砂塵硝煙の如し。岩崎君朝来て郁兄と共に夜九時迄語る。夜に入りて雨。大嶋兄へ手紙書く。」

前者は小樽と札幌の間を忙しく往復しているうちに小樽日報社の小林寅吉事務長と衝突し、暴力を振るわれ退社する時期のもので、恐らく落着いて日記を書く心境になかったものと思われる。後者は、釧路を離れた直後、小樽から連れ戻した家族を宮崎郁雨に託して、自分は単身上京すべく準備にいとまない中で書かれた日記である。いずれも非常に短い、簡潔明瞭な文章になっており、これだけで意味がわかる。多忙な時期、あるいは落着いて日記を認める心の余裕のない時の啄木日記の典型的なパターンとして認識しておく必要がある。これらには、書き直しや書き加えの意思が認められない。

一方、一次日記の1月9日以降と酷似している文字通りのメモが存在した。「紙片メモ、十二月分」と題した明治41年12月3日から25日までのものである。12月4日メモは、

「(ハ)ノニ 六時平野(赤痢)太田、電話阿部へゆく、平野へゆく」

となっており、12月4日の日記は、

「午前六時平野君が昂の原稿催促に来たがまだ出来てゐない。すぐ起きて寒さにふるへながら“赤痢”の稿をついだ。午後一時まで一行隔四十枚煙草も忘れて執筆、脱稿。すぐ車夫に持たして平野君宅まで届けた。

それから(ハ)の二。書き終るところへ太田君が来た。

太田君と小奴の話をした。

今日は実に満足な日であった。日が暮れると阿部次郎を訪ねて、初対面、面白く話して原稿を頼んで七時半帰宿、金田一君と話して、それから平野を訪れ、寒さに首をすくめ乍ら森川町の通りをブラついた。」

と後日書き直された。

このメモは紙片に記されており、あとで日記を書くために用いられたことは明白である。この紙片メモと、一次日記の1月9日以降の書き方が非常に良く似ている。どちらも、人名・時刻・事がらなどの羅列で、これからだけでは正確には意味が理解できない。一方、小樽日報退社前後や、小樽の六日間、最後の函館の部分は、文章が短かくても、それだけで意味がわかるので、両者は本質的に違っていると考えることができる。以上のことから、一次日記の1月9日以降は明らかに後日日記を書くためのメモだと判断できる。しかしながら、このメモは、1月9日以降について書くためのものであり、1月8日以前の一次日記を書き直すこととは関連づけて考えられない。いずれの研究者の場合もこの点が不明確なため、論点がかみ合わない。ここは区別して考える必要があろう。

一次日記1月9日以降は、後日日記を詳細に書くためのメモであるという検証を行った。その際に、1月9日以降の一次日記が、明治41年12月の紙片メモと非常に良く似ていることを指摘した。しかしながら、その反面、両者には決定的な違いがあることを見逃してはならない。どちらも、後日日記を詳細に書くためのものでありながら、一方は紙片に書きつけられたメモであるのに対し、1月9日の方は日記帳そのものに記されたメモである。これは一体何を意味するのか。

一次日記は、前年の明治40年1月1日に始まる丁未日誌に引き続いて記されたものである。その日記帳に、メモが直接書き込まれた背景には以下の三つのことが考えられる。第一は、足かけ2年にわたり、丁未日誌、一次日記の順に書き継いできた日記帳そのものを放棄することである。メモを記したあとで同じ日記帳に、そのメモをもとにした詳細な日記を書くななどということは考え難いので、日記帳に直接メモを書き込んだ時点で、この日記の放棄を決めているだろう。もしそのままこの日記帳を継続して利用するつもりならば、メモは別の用紙を使ってなされたと予想されるからだ。第二は、

この日記帳の放棄はとりもなおさず、新しい日記帳に変えるということである。すなわち、メモされたことがらは、別の新しい日記帳に詳細に書き直されるように運命づけられていた。第三はすでに論じられたことであるが、このメモがあとから日記を詳細に書くためのものであったことである。しかしここからだけでは、このメモが、1月9日以降を詳細に書くためのものであったか、あるいはそれ以前までさかのぼって書くことをも意図していたかを判断することはむづかしい。常識的には、1月9日以降について詳細に書くためのメモならば、二次日記は1月9日から始まると考えるのが普通であろう。だが、実際に1月9日以降のメモを日記に書き直す段階になって気が変わり、区切りのいい1月1日までさかのぼっていった可能性も考えられない訳ではない。このような意味においても、1月9日の一次日記は非常に重要なので、もう一度丁寧に見ていこうと思う。

一行目は、「午前沢田へ小国と共に、留守、」であるが、このうちの、「午前沢田へ小国と共に、」まではメモではないのではないか。なぜならば、部分的ではあるがこれだけで意味がわかること、二次日記の中でこの部分は、「午前露堂(小国)君と共に沢田君を」になるが、一次日記とほとんど変化していないからである。メモになるのは、「留守」からであろう。つまり、啄木は一行目「午前沢田へ小国君と共に」と書いたところで日記を書き続けることをやめ、メモに変えたと考えることができる。そこで日記を書き続けることをやめ、メモにした理由は何か。ここには、沢田と小国の二人の名前が登場する。一次日記の沢田という呼び捨ての名が、二次日記で沢田君に改められていることから、書き始めた日記を途中でやめてメモにしたことと沢田信太郎がかかわっているような気がしてならない。

日記を書くのを途中でやめ、メモにしたことは、古い日記帳をやめて新しい日記帳を用意することを意味しているので、そのことと沢田信太郎の接点を考察する。一次日記1月9日の部分は、実際には何日に書かれたものだろうか。

1月9日夜は沢田の家で小国・奥村と語り合い家に帰ったのが午前1時20分だったのでこの日には書けなかっただろう。翌10日午前中は日記を書く時間はあったはずだ。午後からは出かけて夜10時に家に戻るが、すぐ沢田の家へ行き家に帰って寝たのが午前1時半であった。11日は割合早く起き、8時すぎに奥村を訪問後、午前中は家にいてここでも日記を書く時間はあったはずである。午後は斉藤大硯が来て3時半頃まで居て、それから桜庭保を訪ね夕方帰宅夜今度は奥村と沢田へ行き午前3時に家に戻った。12日は11時まで寝ており遅い朝食後、1時に桜庭保を訪ねその足で桜庭ちか子に会いに行った。夕方自宅へ戻って夕食後沢田宅へ、9時半頃帰って寝たということなので、この日は日記を書く暇があったように思えない。このように見ていくと、実際に一次日記の1月9日の部分を書いたのは、9日から12日までの4日間のうちいつだったかが限定されてくる。すなわち、10日の午前中から午後小国を送るために外出するまでの間か、11日朝に奥村を訪ねた後家に帰ってから斉藤大硯がやって来るまでの間のどちらかであることがわかる。一体どっちだったのだろうか。

啄木一家は、明治四十年の大晦日を越すために、妻節子の唯一筋残った帯の他、母親と自分の衣類を質入れして金を作った。そのほとんどが借金の返済にあてられた。1月2日に床屋へ行き19銭支払って、「アト、石油と醤油を買え一文もない」状態になっていた。1月7日には飛白羽織と蚊帳を質入れして2円借り、翌8日には知り合って間もない西堀秋潮から1円50銭借りた。1月9日一次日記のメモが直接日記帳に書き込まれたことは、丁未日誌に始まる戊申日誌を放棄し、新しい日記帳に替えることを前提にしていることはすでに説明した。日々の生活費に事欠くような暮らしを続けていた啄木が、古い日記をやめて、新しい日記帳に書くべくメモを始めたということは、新しいノートを買い求める金銭的なメドがあつたのことだろう。

さて、その金のメドがあつたのは、1月10日

と11日のどちらであろうか。

1月10日(二次日記)

「帰ってみると、留守中に恰度沢田君が来て、白石社長からの厚い好意なる一釧路新聞に書いて呉れろといふ原稿の前金として、一十円を置いて行ったとの事であった。」

このあとすぐに沢田の家を訪ねて再度家に戻ったのは夜中の1時半なので、10円を手にしてから、机に向ったと考えられる時間は、翌11日の午前中以外にないことになる。以上のことから、1月9日一次日記を書いたのは、1月11日午前中であつたらうと推定される。

一次日記を途中で停止してメモにしたことと沢田信太郎とのかかわりについて調べる目的で、1月9日の部分が実際にはいつ書かれたのかを検証してみた。その結果、1月11日午前中に書かれた可能性が高いことが明らかになった。前日夜遅く、白石社長の命を受けた沢田が届けた10円というまとまった収入があつたことが、1月9日一次日記をメモにした背景にあるものと考えられる。さらに注目すべきは、ここでもやはり10円という金の受け渡しに沢田が深くかかわっていたことである。もともと、小樽日報を退社した啄木を釧路新聞に就職させようと、白石社長と啄木の仲介をしていたのが沢田であつた。それが年を越してからやっと日の目を見た訳である。これらのことを総合すると、1月9日の一次日記が一行目の最後の部分からメモになることと、沢田信太郎とが深く関連しているのは間違いないものと思われる。

そこで問題を先に進める。一次日記のメモが、1月9日以降について詳細に書くためのものであつたのか、あるいは、1月8日以前にさかのぼって書き直すことを意図したものであつたのかを考える。つまり、図1のBのメモがDを書くためのものであつたのか、Cまで書き直すためのものであつたのかを考察する。

そのような目的で1月8日以前の一次日記と二次日記の内容を比較する。一次日記をメモにした背景には、沢田の存在があつた。一次日記と二次日記とで沢田の評価が大きく変らなければ、1月9日メモはその日以降について詳細に

書くために用意されたが、実際に新しい日記帳に書き込む段階になって1月1日までさかのぼつたと解釈できよう。反対に、一次日記と二次日記とで沢田信太郎の評価が大きく変るようなことがあれば、1月8日以前にさかのぼって日記を書きかえる積極的な意思が認められるので、1月9日メモが1月8日以前までさかのぼって書くことを前提にしていると解釈できよう。

実際に、1月1日から1月8日までの一次日記と二次日記の比較をしてみよう。

1月5日一次日記

「夜、沢田君が来た。男に節操が無かったら女に血の気のないと同じ事サ。おへつらいは聴いて気持のよいものではない。

『世渡りの上手な人は』と自分は考えた。『自分らの仲間ではない。』信念！ 信念！」

1月5日二次日記

「夜、沢田君が来た。自分の事が何とも決定せぬので、余程辛い思ひをして今迄来なかつたのだ。」

1月5日一次日記と二次日記とでは、明らかに沢田信太郎の評価が変わっている。したがって1月9日一次日記のメモは、1月8日以前にさかのぼって日記を書き直すことが前提にされていたと考えることができる。

沢田信太郎は号を天峰と称した。啄木との出会いは、明治40年函館が最初である。啄木が函館商業会議所の雇員に採用されたのは、沢田の尽力によるものであつた。明治40年8月の大火で焼け出された沢田は、ただちに札幌へ出て道庁吏員をしていた。この沢田を、社長の白石を説得して小樽日報編集長に据えたのは啄木である。こうして、沢田は11月20日から小樽日報に勤務することになる。しかし、それから約三週間後、啄木は事務長の小林寅吉とのトラブルがもとで、周囲の者が止めるのもきかず退社してしまう。退社した啄木は、沢田も自分のあとを追ってやめるものと思っていた⁶⁾。実際には、沢田は退社せずに、別に白石社長が経営する「釧路新聞」に啄木を採用してもらおうべく奔走していた。だが、この工作は年内には実らず、

越年する。職を失い、正月らしくない正月を迎えていた啄木は、沢田の尽力に過大な期待をかけていただろう。一次日記1月5日の「男に節操が無かったら女の血の気の無いのと同じ事サ。」というのは、小樽日報を退社もせず、自分の就職への期待にも答えてもらえない啄木の苛立ちが、そのまま表現されている。その後、啄木の就職問題は一気に進展して10日夜沢田が10円を持って来る。翌11日朝外出して戻ってから、1月9日一次日記の一行目途中まで書きかけてやめ、続けてメモを直接日記帳に書き込んでいったのであろう。したがって書きかけの一行中に沢田の名前が出てくるのは偶然ではなかろう。この時点で沢田の評価を変えるために日記をさかのぼって書き直すこと、そして、それは新しい日記帳を用いて行うことを決めたのであろう。

塩浦彰は、1月9日に沢田と桜庭のラブロマンスを知った啄木が創作的興味を抱いて、日記の書き直しを決めたとしているが、これとて沢田に対する評価が変らぬうちはあり得ないことであろう。まず最初に、沢田への評価が変わり、それに続いて創作的興味が起ったと考えるべきではないだろうか。

目良卓は、日記書き直しが沢田に対する評価を変える目的で行われたとする今井泰子の説の反証として、野口雨情の場合は日記を書き直していないと指摘している。しかしながら、確かに日記の書き直しはしていないが、野口の場合には斜線を引いて抹消しているのである。

明治40年10月16日

「この日一大事を発見したり、そは予等本日に至る迄岩泉主筆に対して不快の感をなし、これが排斥運動を内密に試みつつありき、然れどもこれ一つ野口君の使囑によれる者、彼『詩人』野口は予等を甘言を以て抱き込み、秘かに予等と主筆を離間し、己れその中間に立ちて以て予ら売り、それ一人うまき餌を貧らむとしたる形跡歴然たるに至りぬ、予と佐田君と西村君と三人は大に憤れり、咄、彼何者ぞ、噫彼の低頭と甘言とは何人をか欺かざらむ、予は彼に欺かれたるを知

りて今怒髪天を衝かむとす、彼は其悪詩を持ちて先輩の間に手を擦り、其助けによりて多少の名を贏ち得たる文壇の奸兒なりき、面して今や我らを売って一人慾を充たさむとす、『詩人』と抑々何ぞや」

10月17日

「野口は愈々悪むべし」

以上の二ヶ所は、後日斜線で抹消された。このあと、10月末に野口が小樽日報を退社するまでの間に、彼はたびたび啄木日記に登場する。

10月8日 「午後野口君他の諸君に伴はれて来り謝罪したり。其状慙むに堪へたり、許すことにす。」

10月22日 「社は暗闇のうちにあり、野口君は謹慎の状あらはる。」

10月30日 「野口君は悪しきに非らざりき、主筆の権謀のみ。」

10月31日 「野口君遂に退社す。主筆に売られたるなり。」

啄木と雨情が初めて出会ったのは、明治40年9月23日のことである。二人はその後、いっしょに小樽日報に入社、10月15日の初号発行のために尽力する。しかし、創業したばかりの新聞社は組織も経営も安定せず、社内のゴタゴタが続いていた。啄木と雨情は、主筆の岩泉紅東排斥運動を始めるが、その計画がもれ、反対に相手側の謀略にかかる。その結果、雨情は退社させられる。10月16日の日記は、岩泉側の反撃に合って啄木と雨情の関係にひびが入った様子がかがわれ、相手の作戦が成功したことがわかる。30日に主筆に呼ばれ、給料を5円増し、三面主任を言い渡された時、それが自分に対する懐柔策であり、雨情が無実であったことを啄木は悟る⁷⁾。日記に斜線を引いて抹消したのは、恐らくこの日だろう。

ここでは、友人野口雨情に対する見方が誤っていたことに気づいた時に、啄木は日記を抹消したことに注目する必要がある。この部分は丁未日記の終りに近い方にあり、最初からさかのぼって書き直すことなど不可能であったろう。これが新年であれば、書き直しをした可能性は極めて大きかったのではないかと想像される。

一人の友人の人物評価を変えるために、啄木が日記を書き直すことは考え難いとする目良の説だと、石川啄木という人間像を誤って解釈することにならないだろうか。

まとめ

啄木日記の本質や小樽時代の啄木を追求するための最初の段階として、日記書き直しに関する諸説を改めて検証した。社会主義思想芽ばえ説・沢田・桜庭ラブロマンス説いずれの場合も、一次日記の書き直しを決めたとされる1月9日の日記の考察が不十分である。

1月9日一次日記の詳細な検討を行った結果、日記を途中でやめ、メモにしたことと沢田の関連が予想された。そこで、両者のかかわりを明らかにする目的で、1月9日の一次日記が実際に記された日時の特定を行った。啄木の行

動や金銭の収支から、その日は1月11日と推定された。以上のことから、沢田信太郎に対する評価を変えるために、啄木は1月9日一次日記をメモにしたと考察した。

文 献

- 1) 石井勉次郎 1972 私伝石川啄木 詩神彷徨 桜楓社
- 2) 加藤悌三 1973 石川啄木論考 啓隆閣
- 3) 目良卓 1977 石川啄木社会主義思想へのめばえについて 中央大学国文 第20号
- 4) 今井泰子 1974 石川啄木論 塙書房
- 5) 塩浦彰 1993 啄木浪漫 節子との半生 洋々社
- 6) 啄木全集 第七巻 1968 明治40年12月23日 宮崎大四郎宛書簡 筑摩書房
- 7) 福地順一 1978 石川啄木と野口雨情(中)―雨情の閱歴をたどりながら― 原始林第33巻第4号